



小学生の読解課題・小6・物語文⑤

わたしは、明かりがもった家の台所にいた。目の前にはお母さんがいた。お母さんは粗塩あらじおをくたくのに使う瓶びんを手にして、テーブルの反対側に立っていた。

「お母さん・・・お母さん・・・。」わたしは呼びかけた。

きつと、わたしがまだよち歩きをはじめたばかりのころ、転びそうになってお母さんのスカートにしがみついたときも、こんな口調で「お母さん」といったにちがいない。こんどはスカートにつかまろうとしたわけではなかったが、お母さんにしがみつこうとしたのは同じだった。そのときのわたしは、本当に、なにかしつかりしたものにつかまらなければ、いまにも倒たふれてしまいそうだったのだ。

ありがたいことに、お母さんはしつかりしていた。

「まあ！」と、お母さんはひと声あげただけだった。きつとわたしは死人のような顔をしていたにちがいない。お母さんは、わたしをすわらせて、手を取ると、血行をよくするためにごしごしこすりはじめた。その手がとてもあたたかく感じられたので、自分の手がひどく冷たくなっていくことに気づかされた。このまま気をうしなうんじゃないかしら、と思った。

それからお母さんは、わたしの口にコップを押し当てた。わたしは中に入っていたワインをすこしだけ飲み込んだ。しだいしだいに、氷のかたまりのような体の中で熱がめぐりはじめた。

「気分はよくなった？」お母さんはいった。「さあ、なにがあったのか、話してちょうだい。レバウディさんの家にいたんじゃないの？この数日、村は静かだし、なにか危険な目に遭あうとは思えないけど。」

「そう、そこにいたの。」わたしは声をふるわせながらいった。それだけいうのもせいっぱいだった。

わたしがさらにしゃべれるようになる前だった。まるで突風とつふうが吹きこむように、レバウディさんが、ノックもせず、「ごめんください。」ともいわずに、飛びこんできた。レバウディさんも死人のような顔をしていた。レバウディさんは、そうしようと思えば、とちゅうでわたしに追いつくこともできたにちがいない。ただ、子どものわたしとちがって、大人のレバウディさんが村を全力で走り抜けたら、いやでも人の目を引いてしまふから、そうしなかったのだろう（わたしはじつさいそんなふうに走っていたにちがいないのだが、自分ではおぼえていなかった）。

「ここへ来るとちゅう、話さなかったでしょうね？だれにも話さなかったでしょうね？」レバウディさんは、入って来るなり、わたしに向かって激しい口調でいった。

お母さんがかわりに答えた。「なにも話していませんよ。話せるような状態だと思えますか？なんでこの子がこんなありさまになったのか、わたしも知りたいんですけどね。」

日

点

レバウディさんは大きなため息をもらすと、ようやくすこし自制心を取りもどしたようだった。そして、あいさつもまだだったことを思い出し、お母さんにわびると、声をひそめて事情を話しはじめた。わたしはまだ頭がぼーっとしていて、なんとか聞き取れたのは、「そのう・・・残念なことに、見てしまったんです・・・。」ということばだけだった。

「ええ、見たわよ！迷信だっていったのに！」ようやく声を取りもどしたわたしは、身震いしながら叫んだ。「迷信？なにが？」

なんのことをいっているのかわからないという顔で、お母さんがきき返した。でも、レバウディさんには十分すぎるくらいにわかっていたはずだ。

「幽霊よ。」わたしはしぶしぶ答えた。でも、見たのは事実だから、そういうしかなかった。

お母さんとレバウディさんはだまって目を見交わした。ふたりの目はとてつもなく大きく見開かれ、眉毛が額のとっぺんまでは上がりそうだった。そしてその目で、わたしには理解できない問いやメッセージを送り合っていた。やがて、お母さんがわたしの方を向いていった。

「つまり、リゼッタ、あなたは、見たっていうのね・・・。」

「ええ、そうよ！」わたしはぶちまけるようにいった。ただ、お母さんが口にしなかった例のことばをふたたび使うのはさけた。

「そうじゃないとしたら、なんなのー真っ白な顔で、ずっと昔の服を着ていたのよ・・・長い裾を引きずって・・・ほんとなのよ！」わたしは、我をうしなつたように、わめいていた。

ところが、奇妙なことに、レバウディさんはいまにも笑い出しそうに見えた。笑うといっても、ちょっとヒステリーを起こしたときみたいにだ。たしかに、お母さんの顔を見つめるレバウディさんのメガネの奥では、感情のたかぶりや安堵が入り混じった目が輝いていた。そして、その目からモールス信号のようなものを発信して、お母さんに向けてメッセージを送っていた。それは、「よかった！」とか「助かったわ！」というような意味を伝えようとしているみたいだった。

お母さんは、メッセージの内容をうまく読み取ったものの、レバウディさんと同じ考えではないようだった。

「いえ、だめですわ。この子をこんなふうに、わけもわからずおびえたままにしてはおけません。申しわけありませんが、やっぱり、話すべきです。」

「話すって、何を？」わたしは口をはさんだ。あとき見たもの以外に、まだ秘密にしているものがあるっていうの？わたしはなにがなんだかわからなくなった。

でも、ふたりとも答えてはくれなかった。わたしのことを話しているというのに、まるで、わたしのことなどどうでもいいようだった。なんだか、腹が立った。

レバウディさんは、落ちつかないに、両手をもみしだしていた。

「危険です。危険すぎます！しじゅうたくさんの友だちに囲まれているんですよ。うっかり口をすべらせかねませんよ。これまで苦労してきたの

も、人のうわさになるのをさけるためじゃないですか？万一の場合はどうなると思うんです？待っているのは、恐ろしい結末だけですわ！」

レバウディさんは声を落としてはいたが、それでも力をこめてしゃべっているせいで、なにをいっているのかはほとんど聞き取れた。でも、その意味までは理解できなかった。口をすべらせれば、恐ろしい結末が待っているというのは、いったいどういうことかしら？レバウディさんがそんなに恐れていることって……。

わたしの脳裏には、戦争中に起こりうるあらゆる恐ろしいことが次々と浮かんできた。パルチザンの夜間の奇襲、ファシストの掃討作戦、ドイツ兵による懲罰行為、地雷、爆弾、砲撃や銃撃戦……。どれもこれも、なにか秘密を守ることと関係があってもおかしくない。それがどんな秘密だか知らないけど、もしもわたしがしゃべったら、破滅や破局が待っているというの？とりかえしがつかないような事態になるというのだろうか？

「しゃべったらいけないとわかっていたら、しゃべりません。」お母さんがいった。

お母さんはわたしに視線を向けていた。じっと見つめられて、わたしはまるで、値踏みされているような圧迫感を感じた。もう自分が無視されているなんて不満をこぼすどころではなかった。それどころか、お母さんの投げかける視線の重み、思わず背筋がぴんとなってしまっくらいだった。

「あなたは、ほんとうに大事な秘密をしゃべらずにいられる？」

わたしは、「もちろんよ。だって、いつかの朝、グスティンおじさんがパルチザンの友だちのためにニヨッキを作っていたことも、だれにも話していないのよ。」と、いいたいところだった。でも、レバウディさんの前でいえば、すでにおしゃべりが過ぎてしまう。

だからわたしは、自分のことばの調子から、真剣さや責任感や信頼感が伝わることを願いながら、「うん、だまってられるわ。」と答えた。

ついさっきまで恐怖のあまり凍りついたようになっていたわたしは、ふたたび好奇心をおぼえるまでに余裕をとりもどしていた。いったいふたりの話から、どんな事実が飛び出してくるのだろう。それが知りたくて、うずうずしていた。おかげで、幽霊の方はすこしばかり色あせて、幽霊にふさわしくというのか、おぼろに薄れかけていこうとしていた。幽霊を見たのはたしかだけれど、問題の核心はどっやらほかのところにあるように思えてきたのだ。

「いいこと、仲のいい友だちにだしてもらしちゃだめなのよ。こんなご時世だから、まわりまわってだれの耳に入るかわからないでしょう。たとえば、ティルデのご両親は悪い人たちじゃないけど、仕事がいろいろんな人に会うから、あの人たちが耳に入れたうわさはすぐに広まってしまうのよ。だから、そんなことにならないようにしなくちゃいけないの。」そういってお母さんは念を押した。

「わかったわ。それに、ここには仲のいい友だちあまりいないから。」

それはほんとうだった。村での遊び仲間の中には、クラウドディアに代わるような友だちはひとりもいなかった（クラウドディアというのは、わたしの幼なじみの親友で、別の土地に疎開していた）。

けれども、わたしがそう答えたすぐあとに、日が暮れるまで遊んでいた弟のフレードが息を切らしながら帰ってきたので、わたしたち三人はあ

わてて口を閉じなければならなかった。まだ肝心なことはなにも明かされていないというのに。悪気はないのだろうか、まったく、小さな弟はいつもこんなふうな場をだいなしにしてしまう。

フレードは丸く見開いた目で、まだ食事の用意ができていないテーブルをながめ、それから、支度が遅れた原因であるレバウディさんに目をやった。そのレバウディさんといえば、フレードが入ってくるのと同時に、手近にあった椅子にさっと腰を下ろすと、なんでもないうすをよそおって、服のしわをのばしていた。フレードはびっしょり汗をかき、ほこりで顔がうすよごれていた。お母さんは、これさいわいばかりに、顔を洗ってくるようにいって、フレードを部屋へ追いやった。

それからお母さんは、大急ぎで食卓の支度をはじめ、皿やコップを投げるようにして、並べていった。でも、お母さんの気がせいいたのは、食事の支度がまだだったからではなかった。

「急ぎましょう、レバウディさん。あの子はすぐにもどってきますから。」

それがなんであれ、明らかに、お母さんたちはフレードの耳には入れたくないようだった。

レバウディさんは肩をすくめたが、ようやく心を決めたようだった。つまり、話すことにしたのだ。

「リゼッタ、たぶん、これ以上あなたに隠しておいてもしかたがないでしょう。あなたは、心ならずも、すでにこの件に巻きこまれてしまったんだし、あなたにも知っておいてもらったほうが危険もすくないと思うの。それに、そのほうが、秘密を守るのが、文字どおり命にかかわる大事なことだとわかってもらえるでしょう。」

レバウディさんはいちだんと声を落とし、いまではささやくようにしゃべっていた。

「あなたが幽霊だと思ったのは——たぶん薄暗かったせいもあるだろうと思うし、落ちついて考えれば、幽霊を見たなんてことあるはずないとあなたにもわかったでしょうけど——じつは数か月前からわたしの家にかくまっているユダヤ人の女の子なの。」

レバウディさんの話を聞いたわたしは、自分が幽霊でもなんでもないものにふるえ上ったのだと知って気を悪くはしたが、ただそれだけだった。ユダヤ人の女の子？それがどうしたっていうの？どうして、そんなことを話すのに、まるで陰謀でもくわだてるように声をひそめなければならぬのかしら？

「あなたも知っているとと思うけど、しばらく前からドイツ兵や悪辣なファシストの連中がユダヤ人狩りをしているの。もしもあの連中に見つかったら、ユダヤ人も、ユダヤ人をかくまった者もとても危険なのよ。」お母さんは気がせくようすでそういった。

でも、わたしにははじめて聞く話だった。前にもいったように、そのころは、人々のあいだにいろんなうわさが流れていた。でも、それだけに、だれもがそうしたうわさのすべてに通じているわけではなかったからだ。

「狩り」ということばにわたしは、山や森の中でおおぜいの人が銃や角笛や犬で獲物を追い立てている場面をばくぜんと思ひ浮かべた。でも、あの屋敷の中に逃げこんで、心臓をトキドキさせながら身をひそめているかれらの獲物は、オオカミでもイノシシでもなく、わたしと同じような女の子だというのだ。

ともかく、お母さんはわたしをもうほうっておいて、レバウディさんをせきたてた。「さあ、もう帰って、女の子を安心させてやってください。きつと、不安で死にそうなはずですわ。早く行ってください。ここではこれ以上の話はできませんから。」

お母さんのいうとおりだった。二階からは、フレードが階段を下りてこようとしている気配が感じられた。

小説の中の一場面みたいに夜の闇の中に消えていこうとするレバウディさんは、その前にわたしに小声でささやいた。

「お願いよ、しゃべらないでね！それから、明日うちへいらっしやい。あの子を紹介するわ。」

レバウディさんはきつと、その女の子と知り合えば、わたしの口がいつそう堅くなると考えたのだろう。

フレードは、ぬれてブラシがとさかのように突っ立った髪の毛でふたたび姿を現した。顔は洗うには洗っていたが、髪の毛から水のしずくをぼたぼたしたたせ、それをタオルで受けとめていた。弟の顔の洗い方といったら、いつもこんなふうだ。

「あの人、なにしに来たの？」フレードがたずねた。いつもなら弟は大人の訪問者などには関心をしめさなかったが、このときは、いつもとちがって遅い時間だったので、興味をそそられたようだった。まったく、このだいじなときに、こんどは弟の好奇心をなんとかしなくちゃならないなんて！

でも、お母さんはすぐにその場を収めた。「『あの人』なんて人は知りませんよ。レバウディさんなら、ちょっとあいさつに寄っただけよ。」話はそれで終わりだった。さきほどの話の方はといえば、途中で終わったままだったので、わたしは落ちつかなかった。かといって、フレードの前では、お母さんにたずねるわけにもいかず、しばらくはがまんするしかなかった。

正直なところ、心の底では、幽霊の一件がこんなつまらない形で終わってしまったことを残念にさえ思っていた。幽霊やらお化け屋敷やらについて、わたしたちがおおいに議論していたころ、ローザは奇妙なことばかり起こるある家の話をしてくれた。なんでも、その家では、幽霊を追ひ払うために、しまいには神父さんが呼ばれたのだという。わたしの幽霊もまた追ひ払われてしまった。ただし、神父さんや聖水の力も借りず、レバウディさんのわずかなことばだけで。まるで、ぼっかり穴があいたような感じだった。

でも、じっさいのところ、腑に落ちない点がいっぱいあった。ユダヤ人の女の子だったというのはわかった。でも、どうしてあんなに顔が白かったのだろうか？なぜ、大昔の服を着ていたのだろうか？それに、そもそもユダヤ人というのはどういう人たちなのだろうか？

夕食が終わると、弟はやっと菜園に出ていった。門のすぐ外で友だちと笑ったり、口笛を吹いたりしているのが聞こえた。暗くなってから外に出るときは、声の届くところにいるようにいわれているのだ。

そのとき、頭の中で何度もくり返されていた質問が真っ先に口をついて出た。

「ユダヤ人って、悪い人たちの？」

わたしたちの家にはさし絵入りの聖書があったが、それを読んでもよくわからなかった。そのうえ聖書に描かれているユダヤ人は、わたしたちと同じような人間だったから、なおさらわからなかったのだ。

お母さんは、ふふんと鼻を鳴らすようにため息をついて、いった。

「いい人もいれば悪い人もいるんじゃない。ほかの人たちとおなじよ。ユダヤ人だけが生まれつき悪いことをするようにできているとは思わないわ。」

「ほかの人たちと同じなら、じゃあ、どうして……。」

「どうして、追いまわされたりするのかって？あんたはいつだって理由をききたがるのね？ともかく、わたしは、イタリア人であれドイツ人であれ、罪のない女の子を苦しめるような連中こそ、ほんとうの悪人だと思わう。」

お母さんのいうことはすじが通っていた。けれどもお母さんは、「いまわたしがいったようなことは、だれにもいっちゃだめよ。」と念を押しだ。なにしろ、そういう時代だったから、だれもが用心深くならざるをえなかったのだ。

「明日、ジュリエッタ荘に行って会えば、どんな子かわかるでしょう。わたしはその子に会ったことがないの。あんたもわかると思うけど、レバウディさんは女の子が人目につかないよう、とても気を配っているから。あの午後、はじめてここに来たとき、レバウディさんはそれはひどく取り乱していたわ。なぜって、お店であんたの友だちの話を耳にはさんで、あんたがその子を見たにちがいないと思ったからよ。そのとき、わたしが口の堅い人間だと信じて、レバウディさんは、わたしになにもかも打ち明けたの。そして、勉強をみてあげるといふ理由をつけて、あんたをジュリエッタ荘に通わせようと考えたの。あんたが何度も屋敷を訪れるようになれば、遅かれ早かれ、だれかの目にとまるだろうし、そうすれば、ふたりの女の子の目撃話は、みんなの頭の中でごっちゃになってしまいうからって。」と、お母さんは説明してくれた。

「そうだったの。だから最初の授業の日に、わたしを屋敷の外に連れ出して歩き回させたのね？」

「そうよ。レバウディさんもそうするつもりだっていったわ。でも、わたしは、女の子を見かけたのは、あんたが最初じゃなかったように思うの。だって、もしそうでなきゃ、もうずっと忘れられていた、あの屋敷にまつわる幽霊話が、またみんなのうわさのぼるようになった理由の説明がつかないでしょう。きっと、女の子は家の中にずっと閉じこもりきりの生活がつかなくて、ときどき、夕暮れどきに、山の側に出してもらっていたのね。そこなら、ほとんど通りかかる人もいないし、危険もすくないだろうと考えて。でも、けっきょく、人に見られたのは運命だったのね。どんな場所であれ、人が隠そうとするものは、だれかが見ているものだから。」

「それで、あんなに顔が白かったのね。一日中、家に閉じこもっているから……。」

こまかな疑問がいろいろときあかさされていった。

「それに、あんたを見ておびえた理由もわかるでしょう。あんたがだれかに話すかもしれないと思ったからよ。たとえ、あんたのほうは悪気がなくっても、同じことよ。よからぬ連中の耳に入ったらどんなに危険か、わかるでしょう？」

「牢屋に入れられるの？」わたしはおそろおそろたずねてみた。でも、まさかそこまで、と考えていた。だれにもなにも悪いことをしていない女の子を牢屋に入れようとする人たちがいるなんて想像すらできない。

「もっとひどいことをされるかも。」お母さんはいった。わたしは愕然とした。そんなことがありえるなんて、いったいわたしたちはどんな世界に生きているのだろうか？

「女の子の両親は何か月か前に捕まっているの。レバウデイさんの話では、その後の消息はわからないそうよ。ひどい話でしょ、リゼッタ。できればわたしたちは、あんたを巻きこみたくはなかったわ。でも、事情を知ったからには、秘密を守るのがどんなに大事かわかるでしょ……。」

「うん、よくわかった。でも、はじめから話してくれてもよかったのに。わたしはぜったいしゃべらないから。」わたしはなんだか自分が勇気のある人間になったようであれしかった。いもしない幽霊に腰を抜かして情けないところを見せてしまったので、名誉挽回するためにも、勇気のあるところをしめしたかった。

まだ明らかにない点も多く残っていた。

たとえば、レバウデイさんはどこでその女の子と知り合ったのだろうか、どうして、レバウデイさんは、悪い人間たちから守るために、女の子を自分の家にかくまうなどという、危険で困難な仕事を引き受けたのだろうか。

でも、わたしの頭に引っかけたのは、どうしてあるとき、女の子はひいおじいさんの時代に流行していたような黄色い服を着ていたのだろうかという、どうでもいいようならぬ疑問だった。古い物があれだけたくさん残っている家なのだから、たぶんその説明も簡単につくのだろう。

ともかく、そんなことはどうでもいいと思ったのか、お母さんはその疑問に答えようとはしなかった。

「明日、自分できいてみればいいでしょう。」とだけ言って、お母さんはもうこの話は終わりにしたがった。しじゅう話題にしていたら、それだれかが偶然耳にして勘づかれてしまう可能性が多くなるから、できるだけ話さないようにしなければいけないというのだ。

わたしは、なんだか、これから二重生活を始めようとしているスパイになったような気分だった。ことばにも行動にも慎重になって気を配らなければならぬ。もしも、なにかへまをすれば、牢屋かそれより悪いことが待っているのだ。しかも、危険をこうむるのはわたしではなく、別の人間なのだ。ああ、なんて重い責任だろう。

このストーリー（お話）を、読んだことがない人にも分かりやすいように、要約しなさい。ストーリーが正しく伝われば字数は自由に構いません。

